

沖縄文化協会 2024 年度公開研究発表会

共 催：公立大学法人 名桜大学

日 時：2024 年 6 月 29 日（土）・30 日（日）

場 所：名桜大学 学生会館サクラウム 3F 大講義室 A（名護市為又 1220-1）

参加費：500 円（資料代）

全体スケジュール

総合司会〈小番 達〉

- 9:55～10:00 開会の辞 小嶋 洋輔（沖縄文化協会 2024 年度公開研究発表会実行委員長）
- 10:00～12:15 研究発表 午前の部（29 日・30 日）
- 12:15～13:30 一昼食休憩ー ＊学内売店お休みにつき、お昼はできるだけご持参ください（コンビニ徒歩片道 15 分）
- 13:30～16:55 研究発表 午後の部（29 日・30 日）
- 17:00～17:30 名桜大学共催特別講演 波照間 永吉名桜大学特任教授
名桜大学の「琉球文学大系」刊行事業について（29 日）
- 17:30～20:00 懇親会 於サクラウム 6F スカイホール（29 日）
＊会費：一般 3000 円、一般発表者 2000 円、学生 500 円 司会〈小番 達〉
- 16:55～17:00 閉会の辞 仲原 穰 沖縄文化協会会長（30 日）

研究発表 6 月 29 日（土）

【午前の部】

司会

- ①10:00～10:30 玉城 弘（浦添市文化協会 沖縄語部会長） 〈西岡 敏〉
「よんたむざ」他の語源から見えてくる琉球語の成り立ち
- ②10:35～11:05 大嶺 可代（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員） 〈西岡 敏〉
沖縄語辞書 GPTs の可能性について
- ③11:10～11:40 卯田 卓矢（名桜大学） 〈仲原 穰〉
「危機言語」継承活動における集落と自治体の関係性 ―沖縄県石垣市を事例に―
- ④11:45～12:15 山本 正昭（沖縄県立博物館・美術館主任学芸員） 〈屋良 健一郎〉
グスクの石積みにおける加工石材についての瞥見
ー グスク時代の石材利用をグスクの石積みから考える ー

【午後の部】

- ⑤13:30～14:00 カーズ バーバラ（武蔵野学院大学） 〈照屋 理〉
伊平屋島字田名のウンジャミとシヌグーコロナ禍明けの変化を中心に
- ⑥14:05～14:35 ヤナ ウルバノヴァー（法政大学） 〈松永 明〉
琉歌と和歌の表現比較研究 ―「秋」と「紅葉」をめぐって―
- ⑦14:40～15:10 石橋 佐紀子（沖縄県立芸術大学大学院後期博士課程） 〈我部 大和〉
琉球人が享受した大和芸能 ―琉球国内の記録から―
- ⑧15:15～15:45 澤田 聖也（東京藝術大学未来創造継承センター大学史史料室） 〈田場 裕規〉
ハワイ大学マノア校における琉球芸能クラスの役割と影響力
- ⑨15:50～16:20 桃塚 薫（拓殖大学） 〈波照間 永吉〉
八重山の郷土芸能と地域メディアで描かれる「八重山らしさ」について
ー『月刊やいま』のテキストマイニングによる分析を中心にー
- ⑩16:25～16:55 高江洲 義英（おもろさうし保存会会長） 〈照屋 理〉
「おもろさうし」の歌唱法と「ふし名」の関係 ―第 1 巻第 1 首「あおりやへがふし」を謡う―

【名桜大学共催特別講演】

*17:00～17:30 波照間 永吉（名桜大学特任教授）

名桜大学の「琉球文学大系」刊行事業について

研究発表 6月30日（日）

【午前の部】

司会

- ①10:00～10:30 兼島翔子（国立劇場おきなわ企画制作課調査資料係） 〈鈴木 耕太〉
戌（1838）年御冠船芸能に使用した躍道具
- ②10:35～11:05 中野 夢（琉球大学地域共創研究科） 〈鈴木 耕太〉
組踊地謡衣裳の変遷について ―戦後の琉球芸能における黒朝衣の導入と変容―
- ③11:10～11:40 高嶺（樋口）美和子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員） 〈波照間 永子〉
「立おとり笠舞手附」「立おとり無手之舞手附」考
―『躍番組』における近世琉球舞踊の動線―
- ④11:45～12:15 源 園生（國學院大學大学院特別研究生） 〈鈴木 耕太〉
与論十五夜踊「二十四孝」の一考察

【午後の部】

- ⑤13:30～14:00 藤原美樹（國學院大學文学研究科博士後期課程） 〈小嶋 洋輔〉
折口信夫にみる沖縄の残像 ―「民族史観における他界観念」を読む―
- ⑥14:05～14:35 前里貴史（名桜大学大学院修士課程） 〈照屋 理〉
『久米仲里旧記』の地名と『おもろさうし』
- ⑦14:40～15:10 大西達貴（東京外国語大学大学院・博士後期課程） 〈小嶋洋輔〉
比嘉康雄・平良孝七・東松照明による「トライアングル」関係の多面的展開
―1972年前後の沖縄写真界の展開を捉えるにあたって―
- ⑧15:15～15:45 李舒陵（琉球大学・沖縄大学・県立芸術大学非常勤講師） 〈屋良健一郎〉
冊封使と首里の四公子との交流について
―趙文楷と李鼎元の贈答詩文の分析を中心に―
- ⑨15:50～16:20 照屋 理（名桜大学） 〈中本 謙〉
中近世琉球における語彙の横断的研究の視点
- ⑩16:25～16:55 齋木喜美子（関西学院大学・教授） 〈小嶋 洋輔〉
戦後初期の児童文化活動の萌芽に見る戦前との連続性 ―金城順亮を手がかりに―
-

【沖縄文化協会 2016 年度公開研究発表会実行委員会】

〒905-8585 沖縄県名護市為又1220-1 名桜大学国際学部

小嶋洋輔研究室内 Tel: 0980-51-1092 E-mail: okinawabunka2024@gmail.com

【沖縄文化協会】Tel&Fax 098-887-2652（担当：前野涼子）URL: <http://okinawabunka.c.ooco.jp/>

「よんたむざ」他の語源から見えてくる琉球語の成り立ち

玉城 弘（浦添市文化協会 沖縄語部会長）

日本国より南方へ遠く離れた、東シナ海に浮かぶ亜熱帯のサンゴ礁の島々がある。そこを、流求（琉球）と呼ばれていた。（中国）の「隋書」流求伝 607 年には、国に文字が無く、月の盈虧「月の満ち欠け、動き」を見て時節を記し、草の榮枯によって年歳を計る。又、地理、統治、暦、習俗等々についてもかなり詳しく記録されていると云う。

「隋書」によれば「琉球」は「国」としての統治の形態がかなり整っていた、しかし、言葉はあるが「文字」はなかったと記されている。意志の伝達手段として、どのような（言葉）が遣われていたのだろうか、「琉球語（ことば）は日本古語から分岐した」と云う既成概念に捉われないで考えてみたい。

先ず、当時の琉球人は大自然を相手に狩猟、漁獵中心に自給自足の生活を営み、3～4 世紀頃の人々は亜熱帯で常夏という地理的条件のもとで、洞穴、岩陰等で居住をしていたと推測される。このような生活環境のもと、サンゴ礁の海に豊富な貨幣価値の高い貝類をめぐって、中国、日本国、朝鮮国等と交流があったことは、容易に推測出来る。

中国では古くから夜光貝を使った装飾品「螺鈿細工」等が多く見られ、同じく日本国でも「正倉院」に見られるように楽器「琵琶」に夜光貝の螺鈿細工の装飾が見られる。

又、豪族の古墳から霊のおまもり、魔除けとしての貝類が多く出土し、又、馬具の装飾品としても多く用いられて来た。このことは、琉球国と近隣諸国との間で交流が密にあり、「言葉」がかわされた証と云える。

1893 年、現在の東京大学で教鞭を執っていた英国の言語学者 B・H チェンバレンが来琉して琉球語の研究をし、その結果をまとめて「琉球文典及び辞典」（英文）を 1895 年ロンドンで発行した。その琉球語の文体は「おもろさうし、古文書」のような「五母音的表記法」ではなく、「言文一致」の書法で次のような「三母音的琉球語」で表記されている。

「チュウ ウガナビラ 𪛗い ティンチ デービル 今日は好天気 御座います。」

「グマーヤ ネーヤビランクトウ イチキン ケーチ クウィミ シェービーミ 小さいのが 御座いませんか 一円で つりが 御座いますか。」

本稿は、「おもろさうし」第 15—1116 の「よんたむざ」の語源の他、恩納村の「谷茶」、「伊武部」、佐敷町の「仲伊保」、「ゆんじち」、「ゆんたく」、「ゆんがしまさん」の「ゆん」、絵図郷村帳にある浦添市の（あはき）、読谷村、糸満市の「はんじゃ」、八重瀬町の「すんじゃ」等の語源について用例を示し考察したい。

【引用・参考文献】

おもろさうし 外間守善校注

沖縄の言葉と歴史 外間守善著

沖縄語辞書 GPTs の可能性について

大嶺 可代（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）

2023 年 11 月に、OpenAI 社より ChatGPT の新機能「GPTs」が公開された。プログラミングを必要とせず、対話形式で ChatGPT を用いたアプリケーションを作成できる機能だ。今や AI に目的の出力を生成させるため、その指示を与える“呪文”すなわち PE（プロンプトエンジニアリング）の有効性・必要性が叫ばれている。いまや全世界のあらゆる人々が GPTs アプリの開発に乗り出している状況である。

さて、こういった中にも「沖縄語」を用いた GPTs もいくつか散見される。これらはインターネット普及後現在に至るまでに解説された沖縄語関連サイトと同様、次のような欠点がある。

- ・表記法の統一がとれていない。同音であっても表記法が登録者によって異なる（表記ゆれ）。登録者によって語尾の音を伸ばす／伸ばさないが変化したり、声門閉鎖音が表記に反映されてないケースも多い。そもそも沖縄語は正書法が確立していないため、五百年以上に渡り発話者によって異なる表記がされてきた歴史を持つ。それらを体系的に辞書に収め機能させるためには、統一した表記での登録と参照が不可欠である。

- ・登録された単語の出自に、地域的、時代的幅がありすぎる。様々な立場の人々が一斉に登録を行ったため、一般に用いられない沖縄語や、そもそも沖縄語ではない若者言葉なども登録されており、動詞・形容詞の活用形もあやふやである。

言葉は時代とともに変化していくものだ。しかしながら、「沖縄語辞書」を名乗るからには琉球語が日本語の姉妹語である前提条件を確認しやすい辞書、かつ、できるかぎり幅広い層に用いられる辞書であることが望ましいことはいうまでもないだろう。

今回、AI エンジニアの鈴木智也氏の協力の元で沖縄語辞書 GPTs の制作に着手した。

まず単語登録から開始した。できるかぎり表記ゆれを避けるため、国立国語研究所版『沖縄語辞典』、研究社版『沖縄語辞典』、『沖縄語の入門—たのしいウチナーグチ』の 3 冊を参考に単語登録チェック作業を行っている。登録に際しては名詞、動詞、形容詞など品詞種別も同時に登録し、あとから動詞や形容詞の活用形の登録なども想定している。なお、動植物名に関しては念のため地域差に関係なく単語登録を優先した。

単語登録作業と並行して、沖縄語の会話定型文の再現も試みた。Yahoo!の天気サイトにある沖縄地方の予報を GPTs に読み込ませ、沖縄語の定型文として出力するよう別の GPTs を制作・試行している。他にも占いやおみくじなどのゲーム GPTs で沖縄語の定型文をランダムに出し一般人にも楽しめるように開発中である。これら GPTs の制作状況は weblog 形式でできるかぎり公開し、アプリ使用者との共有を図っている。

「危機言語」継承活動における集落と自治体の関係性

—— 沖縄県石垣市を事例に ——

卯田 卓矢（名桜大学）

2009年のユネスコによる「世界危機言語地図」の発表を機に、日本では危機言語の継承活動が広がりを見せるようになった。継承活動を対象とした研究は、これまで主に県スケールおよび集落単位の活動などが考察される一方で、その中間の組織といえる市町村自治体の関わりや意識に焦点を当てた研究は多くない。集落の活動では、子どもから大人までを対象に、家庭、学校、集落の3者を巻き込んだ取り組みが必要であり、そのためには学校教育・社会教育を所管する自治体（教育委員会）の関わりが不可欠となる。ただ、中には集落との連携に必ずしも積極的でない自治体も存在する。それでは、自治体は継承活動をどのように捉えているのか、また活動に対し自治体と集落の間にはどのような差異があるのか。本研究は以上の問題意識から、沖縄県石垣市を事例に「危機言語」継承活動における市関係者の意識とその背景を考察する。

石垣市は「八重山語」の使用範囲であるものの、集落間で音韻、語彙などに違いがある。石垣市の一部集落は「危機言語」発表以前から住民による方言講座が行われてきた。また、市は2022年から方言講座の支援事業を開始した。住民主導の活動には方言に関心をもつ指導者の存在が大きく、その指導者が集落役員等を交代すると活動が停滞する。そのため、集落は活動の継続性を課題とすることが少なくない。一方で市関係者の中にはこの点に加えて、集落が実践する教授法自体を課題とする。住民主導の講座の多くは単発で、また世代間の日常的な方言使用が困難な現状であることから、市は講座でよく扱われる語彙の習得や発声を中心とするのではなく、文法を含めた体系的な教授法を求める。では、こうした教授を誰が担うのか。子どもへの教授において、集落側は一日の大半を過ごし、子ども同士のコミュニティが形成される学校での学習を期待するが、市は家庭や地域を主体とした学びを求める。市は体系的な教授法を重視しつつも、人材不足や学習時間の確保困難などから集落の活動に期待せざるを得ない状況がある。

他方、市関係者は危機言語の意識醸成の手段として、集落間の方言の違いを認識しつつも、市の人口集積地である四箇字の継承活動を重視する、いわば「戦略としての基準化」を視野に入れている。この背景には、集落の活動が集落内で完結し、言語継承の関心が市全体に十分に広がっていないこと、個々の集落で方言の理解度や危機感に差があり、市として各集落の現状に沿った支援が難しいことなどがある。

以上から、石垣市は集落の活動に理解を示しつつも、いくつかの点で両者に認識の違いがみられる。今後はこうした差異を共有し、自治体と集落が一体となった効果的な言語継承・再活性化のあり方を追究していく必要があるだろう。

グスクの石積みにおける加工石材についての瞥見

—— グスク時代の石材利用をグスクの石積みから考える ——

山本 正昭（沖縄県立博物館・美術館主任学芸員）

グスクと呼ばれる遺跡は宮古、八重山諸島を除く琉球列島各地に所在している。その形態は多様であるものの、沖縄本島中南部に分布しているグスクは石積みを伴う事例が多い。本報告では石積みを有するグスクについて取り上げ、とくに石積みを構成する石材における加工状況について検証していくものである。

琉球列島内に残る67カ所のグスクを見ると琉球石灰岩や古期石灰岩、安山岩、チャートといった石材を石積み用材としている。岩質から見ると琉球石灰岩を石積み用材としているグスクが多く見られると共に精緻に加工できることからそのバリエーションが多く見られる。また、古期石灰岩や安山岩については加工のバリエーションは少なく、精緻な加工は見られない。

このような加工石材は岩質により、大きな違いが見られ、必然的にその積み方にも影響する。

グスクに見られる石材については①自然石、②粗割石、③切石に分類することができる。②については面側を平坦に仕上げる粗割石Ⅰと、面側を四角形に輪郭を整える粗割石Ⅱに細分することができる。③については四角形に面を整える四角形切石、角欠きが見られる角欠き切石、面が五角形以上となる多角形切石、面側を曲面に整える曲面切石に細分することができる。

上記以外には事例は限られるが、石積みの隅角部上部に据える隅頭石やアーチ門の天井部を構成する眉石を見ることができる。

石積みがグスクに導入されてくるのは13世紀後半からとされており、石積み導入当初は自然石が粗割石が主であったと見られる。14世紀中頃以降に加工石材に切石が見られるようになったのとはほぼ同じくしてグスクにおける石積みが高層化していく。石材相互の空隙を丁寧に加工していくことによって埋めていくことで精緻な組み合わせが可能となる。それにより積載する個々の石材が安定することで、より高い石積みを築くことが可能となる。石積みを有するグスクを概観すると高さが10mを有する石積みは全て琉球石灰岩を用材としており、切石を組み合わせた布積みやあいかた積みに限定される。

石積みを高層化していく要因については主に14世紀後半から15世紀前半にかけての琉球列島各地における争いの激化を挙げることができる。障壁としての機能をより高めるために石積みを高層化し、それを実現するために石材の加工をより精緻に仕上げていく方向で深化していったと考えられる。とくに沖縄本島中南部では琉球石灰岩を豊富に採石できることから、石積みの高層化も当該地域を中心にして展開していったものと思われる。

【引用・参考文献】

當眞嗣一1990「グスクの石積みについて（下）」『紀要』第6号 沖縄県教育庁文化課

北垣総一郎2013『琉球のグスク石垣に見る石垣構造の技術的特徴』『しまたてい』No.65 一般社団法人沖縄しまたて協会

宇佐美賢、山本正昭2020「グスクの石積み遺構に係る若干の考察」『沖縄県立博物館紀要』第13号 同館

伊平屋島字田名のウンジャミとシヌグ

コロナ禍明けの変化を中心に

カーズ バーバラ（武蔵野学院大学 専任講師）

奄美諸島南部から沖縄本島北部に至る地域でウンジャミ（女性を中心にした祭り、海の彼方から来訪する神の送迎儀礼）とシヌグ（男性を中心にした祭り）という祭祀が現在も行われている。本研究は、沖縄本島北部の北西に位置する伊平屋島字田名のウンジャミとシヌグの変化に関する分析である。従来の先行研究は非常に乏しく、祭祀の変化過程を先行研究および現地調査に基づいてカーズ（2022）で報告したが、新型コロナウイルス感染症の影響で、わずかな4年でさらに変化が生じた。本発表はそれに関する報告である。

本来、ウンジャミは旧暦7月15日の夜から17日の3日間に亘って行われており、現在は17日にまとめて行われるようになった。15日の夜の神迎えに相当する旅盃儀礼および16日の夜の「オー入り」という魔除け儀礼が省略された。16日の舟送り儀礼は17日の朝に移動され、17日の従来の儀礼の前に行われるようになった。神送りが終わり、各神女で健康祈願が行われ、午後に祝女殿内と神アシャグで男神役によって『テルコロ』という神歌が謡われる。

シヌグは旧暦7月19日から21日にわたって行われていたが、現在は19日にまとめるようになった。従来は19日に1歳、20日に2歳、21日に3歳の男子の健康祈願が行われていたが、現在は1歳の子供のみの健康祈願が行われている。従来は青年団によるお祓い、相撲などが19日に行われており、3日間通に子宝に恵まれない女性を竹馬に乗せるという出産祈願の儀礼が行われていたが、現在は省略されている。

報告者はコロナ禍のため、調査に行かなかった3年間後、2023年に再び田名のウンジャミとシヌグを見学した。その結果、祭祀の簡略化及び継承問題がさらに深刻になったことが明らかになった。特に、長老会の関与が非常に強くなったと思われる。

従来の20人の神女の中、2023年に2人のみが参加した。以前神女の代理を務めた男神役も不参加となったため、舟漕ぎの儀礼に区長ともう一人の長老会員が舟に入った。また、『テルコロ』が、区長と長老会の指示で夕方（約5時）から昼直後に移動され、供え物の準備も整ったままでテルコロの儀礼が実施された。『テルコロ』に関しても、以前は田名サーという男神役が謡ったが、今回は不参加であったため、長老会がその役割を果たしており、謡い方及び神歌の内容に変化があった。

シヌグにも大きな変化があった。従来は父が田名出身の男子の健康祈願であったが、たまに母親が田名出身の場合も認められた。今回はさらなる変化として、島出身ではない男・女の子両方も対象となった。シヌグの際に長老会の関与がさらに著しく、神女は参加したにもかかわらず、役割が全くなかったように見えた。従来は神女に子供を抱かせる儀礼、および田名城の麓へ向かって謡った神歌が省略され、供え物が神女に渡せなかった。その代わりに、両親の会議があった。

【引用・参考文献】

上江洲均 1986『伊平屋島民俗散歩』那覇：ひるぎ社（おきなわ文庫電子版2012年）

カーズ・バーバラ 2022『地方の来訪神儀礼に見られる琉球国家祭祀の影響—北琉球文化圏を中心に』博士論文、法政大学

琉歌と和歌の表現比較研究

—— 秋」と「紅葉」をめぐって ——

ヤナ ウルバノヴァー（法政大学准教授）

四季を詠んだ琉歌と和歌は共に、「秋」や季節を代表する「紅葉」が重要な位置を占める。和歌では春より秋を好む内容の歌が奈良時代に遡り、『万葉集』には「もみぢ」の例も 100 以上ある。平安時代になると、『古今和歌集』の四季の部で「秋」の歌数が最も多くなり、秋を愛でる傾向が一層強まる¹。秋や紅葉は古の貴族や歌人をはじめ、今なお多くの現代人を魅了するものとなっている。一方、琉歌の「秋」は、「春」に続き二番目に多く詠まれる。その傾向は、先行研究²で指摘される『古今和歌集』と『古今琉歌集』の比較から判明し、対象の範囲を広げて得た筆者の研究結果もそれを裏付ける。

日本本土で秋を彩る豊かな紅葉が、常緑樹の多い沖縄にあつては同じように味わえない。本土に近いのはせいぜいハゼノキ程度である。にもかかわらず、本研究対象の琉歌³には「紅葉」の歌が 46 首、「秋」の歌が 129 首もある。背景には和歌の歌語の影響が考えられる。

従来の研究では和歌の影響を受けた琉歌の類似表現が指摘され、「桜」「梅」「月」等の分析がなされた⁴が、「秋」と「紅葉」に関しては詳しい調査が見られない。そこで、本発表では、琉歌人は和歌を通して本土と同じ「秋」を見ていたのか、「秋」や、それを代表する「紅葉」をどのように詠んでいたのかという問題を取り上げることとする。

琉歌の「秋」には、「月」「風」「菊」「紅葉」など、和歌では馴染みのある表現が多く詠み込まれる。しかし、和歌の「秋」が悲哀の美意識であるのに対し、琉歌の「秋」の発想は「月の影のきよらさ」「風のすださ」「うれしごとく（菊）」等の表現に見られるように肯定的な意味合いとなっている。イメージとしては、心地の良い季節の描写に加え、北風に乗って琉球に帰還する船を待ち遠しく思う気持ち等が詠まれる。

琉歌の「紅葉」にも和歌と異なる特徴がある。和歌と同じ「紅葉」や「紅葉葉」のほか、琉歌独自の「黄葉」が「黄葉になるその最後まで」というニュアンスで詠まれる。また、和歌においては「紅葉」の比喻で表現される「変わりやすい心」に対し、琉歌の「紅葉」は「心に深く染める強い愛情」の比喻として逆の意味を表すことがある。さらに、琉歌の「紅葉」は和歌と同じような儚い存在でもあるものの、その無常観より美しさを楽しむ雰囲気や遊びを描く歌数が目立つ。

「秋」や「紅葉」は和歌の歌語として琉歌に多く伝わったが、沖縄の歴史や風土等に合った独自の発想を生み出していくのである。

(JSPS 科研費 21K00311)

【引用・参考文献】

- 1 佐田公子（2008）『古今集の桜と紅葉』笠間書院
- 2 嘉手苺千鶴子（2003）『おもろと琉歌の世界』森話社
- 3 島袋盛敏、翁長俊郎（1995）『標音評釈琉歌全集』（武蔵野書院）と清水彰（1994）『琉歌大成』（沖縄タイムス社）
- 4 嘉手苺 2003、玉城政美（1996）「琉歌における〈月〉の形象」『沖縄文化研究・22 号』（法政大学沖縄文化研究所、395-443 頁）、外間守善（1995）『南島の抒情—琉歌』（中央公論社）等

琉球人が享受した大和芸能

—— 琉球国内の記録から ——

石橋 佐紀子（沖縄県立芸術大学大学院後期博士課程）

本発表では、琉球国内で受容された大和芸能について、その様相と特徴を明らかにすることを目的とする。

近世琉球において、士族たちの間で様々な大和芸能が受容されていたことは、これまで多くの先行研究で指摘されてきた。例えば、江戸立の際は毎度薩摩藩邸にて能楽や人形浄瑠璃などの大和芸能を鑑賞する機会が設けられていた¹。そして、先行研究ではそうした機会に享受した大和芸能が組踊を始めとする琉球芸能の創作に影響を与えたと論じられてきた²。

しかし、これまでの琉球人が享受した大和芸能に関する先行研究には、いくつか課題も残されている。まず、これまでの研究では、琉球人が享受した大和芸能を編年的にまとめ、その変遷を分析した研究はほとんど行われてこなかった。芸能は流行や社会状況の変化で移り変わるものであるため、琉球人が享受した大和芸能についても、時代ごとの違いを調査し、その変化の原因を分析する必要がある。次に、先行研究のほとんどが、琉球国外で大和芸能を享受した事例（江戸や上方、薩摩での芸能鑑賞）を中心に扱っており、琉球国内で上演・鑑賞された大和芸能の全体像は明らかにされていない点も課題として挙げられる。士族たちの家譜資料を見てみると、琉球国内での大和芸能の上演・鑑賞記録もいくつか確認できる。こうした琉球国内での大和芸能受容の記録も分析することで、琉球人が享受した大和芸能の実態を明らかにする手掛かりの1つとなるのではなかろうか。

このような問題意識から、本発表では、琉球国内で大和芸能が受容されたことが確認できる記録を調査・分析し、受容された芸能の種類および時代ごとの特徴を明らかにした。

まず、薩摩入り以前の記録を調査した。その結果、薩摩入り以前の記録には、事実をそのまま書き記したとは言えない資料も多いが、多くの資料において大和芸能への言及が確認できた。これらの記録では、特に能楽について多く言及されていることが分かった。

次に、薩摩入り以降から琉球処分までの記録を調査した。調査対象としたのは主に家譜資料で、適宜周辺資料も参照した。その結果、時期によって記録に現れる芸能や享受の方法、享受の「場」についても変化が見られることが分かった。こうした変化は、芸能の流行の移り変わりのみならず、薩摩藩や琉球国内の社会状況の変化も影響していると考えられる。

今後はさらに資料の調査範囲を広げ、より詳細な実態の把握を目指したい。

¹ 宮城栄昌『琉球使者の江戸上り』第一書房 1982年、板谷徹「家譜に見られる芸能資料2 江戸上り」『ムーサ』9号 沖縄県立芸術大学音楽学部音楽学専攻 2010年、増井愛華「琉球使節がみた日本の芸能—1609年から1872年を対象として—」『ムーサ』15号 沖縄県立芸術大学音楽学部音楽学専攻 2014年など

² 當間一郎「組踊の世界」『沖縄の芸能』オリジナル企画 1981年、矢野輝雄「玉城朝薫と大和芸能」『組踊を聴く』瑞木書房 2001年など

ハワイ大学マノア校における琉球芸能クラスの役割と影響力

澤田 聖也（東京藝術大学 未来創造継承センター 大学史史料室 教育研究助手）

本発表は、ハワイ大学マノア校の琉球芸能の実技系クラス「Okinawan Ensemble Class」と「Okinawan Dance Class」が沖縄系にルーツを持つ学生に与える影響力とそのクラスの文化的・社会的役割について考察する。

ハワイの琉球芸能研究は、城田論文(2006,2007,2011)や遠藤論文(2014,2020)、Ueunten 論文(2007)、Teruya 論文(2014)を筆頭に蓄積されたものがある。これらの研究の多くは、大学等の教育機関以外で披露されてきた芸能を対象に、沖縄系の実践者と芸能の繋がりを中心に論じてきた。実際、移民初期(20世紀初頭)から現在に至るまで、ハワイの沖縄系コミュニティでは、琉球芸能が沖縄や祖先と繋がる重要な要素として認識されている。

本発表は、こうした琉球芸能の重要性を踏まえた上で、教育機関における(本発表ではハワイ大学)で扱われている琉球芸能に焦点を当てている。「Okinawan Ensemble Class」と「Okinawan Dance Class」は、1960年代中頃に始まり、すでに50年以上の歴史を持つが、その実態や役割、影響力について論じられてこなかった。琉球芸能のクラスの役割や影響力は、当時の社会状況や日米関係、世代などによって異なり、講師の指導法もこうした時代の変遷とともに変化していった。発表では、こうしたハワイ大学における琉球芸能のクラスの役割と影響力を歴史的に捉えていくことで、琉球芸能と沖縄系人の関係性を明らかにする。

発表者は、2021年から2023年にハワイ大学マノア校に研究訪問員として所属し、2021年(9月-12月)と2022年(1月-5月、9月-12月)、2023年(1月-2月)の合計4セメスターを「Okinawan Dance Class」の受講生として毎週参加した。そこで、どのように講師が琉球芸能を指導し、また芸能を通して学生に沖縄/琉球の歴史や文化を伝え、沖縄系の学生はそれをどのように受け止め、自身のアイデンティティの構築や沖縄に対する認識を変化させてきたのかを、参与観察と受講生へのインタビューを通して調査した(「Okinawan Ensemble Class」は履修生の人数の都合上、発表者がハワイに滞在していた期間は開講していなかった)。

また、2000年以前のクラスの実態については、元受講生や当時の講師への聞き取り調査をすることで、クラスの役割や影響力の変化を連続的に捉えることを試みた。補足資料にハワイの沖縄系ローカル新聞『Hawaii Pacific Press』(1977-2020)や『ハワイ琉球芸能誌 ハワイ沖縄人 78年の足跡』(1978)、『新聞にみるハワイの沖縄人 90年 戦前編』(1990年)、『新聞にみるハワイの沖縄人 90年 戦後編』(1994)、『UCHINANCHU AHISTORY OF OKINAWANS IN HAWAII』(1984)、『OKINAWARENGO NEWS』(1968-?)、『UCHINANCHU NEWSLEETER』(1982-)などを使用することで、その把握に努めた。

なお、本発表は、2024年度からの研究課題「トランスナショナルな音楽実践と四重意識の関係性—ハワイの沖縄系人を事例に—」(2024年度笹川科学研究助成)の経過報告の一部である。

八重山の郷土芸能と地域メディアで描かれる「八重山らしさ」について

——『月刊やいま』のテキストマイニングによる分析を中心に——

桃塚 薫（拓殖大学 非常勤講師）

本発表の目的は、八重山の郷土芸能に携わる人々が地域メディアの中でどのように描かれてきたのかを明らかにすることである。発表者はこれまで郷土芸能の節歌の習得を通じて形成される「八重山イメージ」に着目してきたが、八重山をテーマとするその他の伝統的なジャンルと節歌との関係を踏まえた考察がなされていない。特に八重山の古謡（アヨー、ジラバ、ユンタ）は節歌を生み出す原動力となった歌謡であり、両者のつながりについて理解することは大変重要である。

これまで波照間永吉（1999）等が行ってきた八重山歌謡のジャンルや場についての研究においては、地域の祭祀で古謡や節歌が具体的にどこで誰によって歌われるかに焦点が当てられ、祭祀の芸能が娯楽へと転換する過程が明らかにされてきた。また久万田晋・三島わかな等は、ラジオやレコードなどの電氣的なメディアと郷土芸能とのつながりによって「沖縄イメージ」が形成されていく過程について注目してきた。さらに八重山の現場においては、労働の相互扶助（ユイマール）のない時代に古謡をいかに継承していくのかについて大田静男等が研究と実践的な取り組みを行っている。

そこでこれらの先行研究を踏まえて、本研究においては活字メディアの地域情報誌『月刊やいま』が郷土芸能の様々なジャンルに携わる人々とそれらの芸能とをどのように描いてきたかに着目する。なお、同誌は石垣島の出版社が 1992 年に創刊した八重山全域の情報に特化した雑誌であり、郷土芸能に関する話題が多数掲載されている。

本発表は、郷土芸能にかかわる人々を取材した同誌の記事の内容分析を中心に行う。分析に際しては、発表者自身が記事内容を読み整理する手法だけではなく、今日の計算機社会科学で広く利用されつつあるソフトウェア（KH Coder）も用いる。同ソフトは自由記述のデータを計量的に分析することが可能であり、解析結果を第三者が改めて検証できるという特徴がある。

予備的考察による結論は以下の通りである。同誌に連載された「八重山人の肖像」という見出しの付く 2003 年までの記事で扱われた芸能に携わる人々について分析したところ、八重山古典民謡を専門とする人やそれに接した経験があると述べる人は、芸能に関連する人々の半数以上を占めている。祭祀と芸能との結びつきに注目する記事は少ないものの、戦前生まれの人々は古謡に親しんでおり、古謡と他の労働とを結び付けて語る傾向がある。また全体的な特徴として、芸能に携わる人々は島（故郷）を大切に思う表現をしていることが明らかになった。

【引用・参考文献】

波照間永吉、1999、『南島祭祀歌謡の研究』、砂子屋書房。

「おもろさうし」の歌唱法と「ふし名」の関係

—— 第1巻第1首「あおりやへがふし」を謡う ——

高江洲 義英（おもろさうし保存会会長）

「おもろさうし」は、全22巻（1554首）にわたる神歌集とされているが、今日伝承されている各地の神女のウムイとはかなり変わった形式をもっていて、不思議に思える。

尚清王の代に第1回採集が行われたとされるが、実際には、尚真王が1447年に各地の按司を首里に集め、その際に各地のオモロを集めたと思われる。その後に神歌主取（おもろぬしどり）を置いて神歌に関する事業を担当させるが、これが疑問の始まりであり、誰が作曲、構成、編集し、おもろさうし全22巻としてまとめあげたか。おそらく同一人物の同一期の作曲であり、三線楽も影響を受けている。現在、「おもろさうし」の第1巻は尚真王の王権の確立、支配体制、政教一致などに伴ったものとなっており、王国の確立、理念とが明らかである。第1巻第1首のオモロは聞得大君が国王を賛美する内容となっているが、これも意図的に配置し直したものであろう。

私は昭和40年から46年にかけて外間守善先生の紹介で、山内盛彬先生より首里王府「おもろさうし」を伝授された。その際に「又」以降の謡い方、さらに「同ふし名」の謡い方も示唆を受けていた。2004年の国立劇場おきなわ開場記念公演の柿落としとして、私どもが、王府おもろの中から「しよりゑとふし」と「あおりやへがふし」を謡った。翌2005年の国立劇場おきなわ開場1周年では、大城学、外間守善、池宮正治先生の指示により、第22巻第1にある「あおりやへがふし」の「又」以降も謡った。その後も「又」以降や「同ふし名」を検討し、今回、「同ふし名」の「第1巻第1首あおりやへがふし」と「第22巻第1首」を比較解説する。

王府オモロの歌唱、編集に関しては、現実には第22巻の編集時に、100年前にさかのぼって、第1巻第1首目から同様の「ふし名」がつけられ、さらにかんりの「ふし名」が重複しつつ全22巻の編集がなされたと思われる。

オモロ形式には、「又」記号が数多く、これも解説が困難とされているが、実はかなり解説できる。オモロの文体、対句などについて考慮すると、各種の「又」の聞き方も得られる。

ほとんどの「おもろ」には、ふし名がつけられているが重複が多く、池宮正治による「おもろさうしふし名索引」を手掛かりとして、今回は第22巻第1首「あおりやへがふし」および又、そして第1巻第1首、および又以降を比較しつつ謡ってみたい。

【参考文献】

1. 山内盛彬：琉球王朝秘曲の研究，民俗芸能全集刊行会，1964.
2. 外間守善：おもろさうし（上下），岩波書店，2000.
3. 池宮正治：おもろさうしふし名索引，南西印刷出版部（ひるぎ社），1979.

戌（1838）年御冠船芸能に使用した躍道具

兼島翔子（国立劇場おきな企画制作課調査資料係）

琉球芸能において躍衣裳や躍道具は見た目の美しさや華やかさばかりでなく、役柄や身分を表すなど演出上も重要な役割を果たしている。製作技術の進歩や、時代による美意識の移り変わりもあることから、踊衣裳や躍道具の研究には現存する衣裳などの研究はもちろんのこと、史資料の検討も必須である。

これまで躍衣裳に関する研究は、須藤良子氏（2014）、古波蔵ひろみ氏（2023）などによって現在の琉球芸能で象徴的な躍衣裳として「紅型」だけではなく、「板締縮緬衣裳」や「琉縫薄衣裳」があることを明らかにしている。

戌（1838）年に行われた御冠船芸能の準備記録である尚家文書第 81、82 号「冠船躍方日記」を板谷徹氏・池宮正治氏によって翻刻されている。また、崎原綾乃氏（2003）によつての戌年御冠船芸能の準備と諸宴を考察した研究はあるが、躍道具に重きを置いた論考は管見のかぎりみあたらない。

そのため、本発表では戌（1838）年の御冠船芸能（以下 戌の御冠船）の史料である伊波普猷著『校註 琉球戯曲集 復刻版』前編と後編（以下、『琉球戯曲集』）と尚家文書第 81、82 号「冠船躍方日記」（以下、「躍方日記」）を中心に、当時使用されていた躍道具がどのように準備されていたのかを考察する。

『琉球戯曲集』には、前編 10 番と後編 11 番の合計 21 番の演目が記され、躍道具が使用される演目は 20 番あり（重複 2 演目）、これらに使用される躍道具として扇子、笠、杖、鞆鼓、團（団扇）、まり、麾、棒、酒具、祭壇などが確認できる。

しかし「躍方日記」においては、『琉球戯曲集』に見られた前述の躍道具全ての作製記録が確認されるわけではない。

両史料は「台本」と「行政記録」という異なる性質の史料であることから記述が一致しない可能性も指摘できるが、「躍方日記」の記述からは躍道具の材料や調達方法の経緯について、『琉球戯曲集』の記録からはそれらがどの演目に使用されたのかについて、それぞれの性質を整理し考察する。

両史料における記述の差異については、「躍方日記」に見られる細工人への褒賞記事の記述を中心に検討を行う。

【引用・参考文献】

池宮正治「組踊の『着付』に関する注釈と若干の考察」文化庁文化財保護部伝統文化課編『平成 7 年度沖縄振興開発計画推進調査報告書「組踊等沖縄伝統芸能の舞台様式及び道具の調査研究」』、1996 年

板谷徹・池宮正治「翻刻『冠船躍方日記』」板谷徹編「尚育王代における琉球芸能の環境と芸能復元の研究」沖縄県立芸術大学音楽学部板谷徹研究室、2003 年

伊波普猷『校註 琉球戯曲集 復刻版』榕樹社、1992 年

須藤良子『琉球紅型のイメージと実像』角川、2014 年

茂木仁史・古波蔵ひろみ『首里城の舞台と踊衣裳』榕樹書林、2023 年

尚家文書 第 81、82 号「冠船躍方日記」

組踊地謡衣裳の変遷について

—— 戦後の琉球芸能における黒朝衣の導入と変容 ——

中野 夢（琉球大学地域共創研究科）

1719 年玉城朝薫の組踊公開から約 300 年、成立当初の組踊は琉球処分による首里王府解体や第二次世界大戦の壊滅的な被害などを受け、変革を強いられながらも再現と継承が試みられてきた。あわせて現在の組踊で使用される立ち方衣裳についても先行研究が進められ再現も行われてきたが、奏楽を担当する地謡は基本的に舞台袖または紅型幕の内側で演奏されてきたからであろうか、十分に分析されてこなかったと思われる。そこで本発表では、戦後以降の地謡衣裳の変遷について舞台演出を踏まえながら一考したい。

王府時代組踊衣装については矢野輝雄、池宮正治、大城學、鈴木耕太、須藤良子、古波蔵ひろみなどの先行研究がある。また戦後組踊の研究では、[畠中敏郎、1994]が大和芸能との比較研究を論じ、[矢野輝雄、2001]では能や狂言との対比における衣裳の特色を示している。さらに[鈴木耕太、2022]では、戦前から戦後の組踊上演の動向と研究史を明らかにし、現在の上演との違いを分析している。他にも[御座楽復元研究会、1997]では実際に史料を反映し、楽童子の舞台衣裳を再現するなど、立ち方衣裳についての研究は厚いが、地謡衣裳への調査研究はいまだ不足している。

以上のような研究を踏まえて本発表では、収集した黒朝衣衣裳 27 点を元に、素材・形・年代や入手経路を検討したい。国立劇場おきなわや伝統組踊保存会の衣裳貸与事業や舞台演出の形式の変化、図像史料・公演記録等を根拠に分析することで、衣裳の変化の背景を考察する。地謡衣裳である「黒朝衣」の変遷から、現代地謡衣裳の社会的役割を明らかにする試みである。

本発表を通して米軍統治下から本土復帰前後、対外的な場面において着用された衣裳が「紋付袴」から「黒朝衣」へと変化し、その後、文化財保護の過程で普及していく黒朝衣から見えてくる緩やかな移り変わりを試論として提示したい。1947 年には米軍慰問での紋付袴の演奏、1949 年ごろには女性地謡の琉球絃衣装[月刊沖縄社、1979]が見られ、1954 年に組踊は神奈川県が無形文化財に指定される。翌年 1955 年になると東京で紋付袴での演奏[豊平良顕、1955]が見られる。1964 年東京オリンピックでも紋付袴を着用した演奏が見られ、1967 年琉球政府文化財保護審議委員会が「玉城朝薫作組踊五組」を重要無形文化財に指定した年には紋付袴、留袖で東京国立劇場での演奏に挑んでいる。翌 1968 年国立劇場公演に黒朝衣が登場する。1970 年代まで女性地謡は紅型衣装に絃着物を打掛した衣装であったが、1980 年には地謡全員が黒朝衣・八巻・大帯を着用し、舞台正面に配置された演出へと変化する。その後 2000 年代にかけて、沖縄県内での組踊伝承者の衣裳は社会事象に連動した傾向を見せる。

「立おとり笠舞手附」「立おとり無手之舞手附」考

——『躍番組』における近世琉球舞踊の動線——

高嶺（樋口）美和子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）

『躍番組』は石垣島の錦芳氏大演用能（1841-1916）が慶應3（1867）年頃に著したとされ、全74番に及ぶ舞踊の演目名と節名、歌詞が記録されており、喜舎場永珣が保存していたものを本田安次が翻刻し『南島探訪記』に収めたものである。原本の所在は不明で、『南島探訪記』で翻刻版をみる事が可能である。本文は二部に分かれており「前半の若衆躍五番、二才躍五番、女躍七番は慶應二年の冊封使御禮式に演ぜられたもの。その翌年、佐敷按司の生年祝には、後半の若衆躍九番、二才二十四番、女躍二十番、打組躍二番、口説二番の全部、或はそれらから選んで演じたもの」（本田1999:327）で、特に後半部は実際に上演された演目というよりもむしろ、レパートリーを記したものとされる。同書には表紙、本文の一部、「立おとり笠舞手附」「立おとり無手之舞手附」の四葉の写真が収められている。この二つの「手附」には踊りの動線を表した線と番号と、おそらく踊りの所作を説明した細字が記されているが、「判読出来ない箇所が多いので、これは写真をのせるにとどめておく」（本田1999:327）とあるように説明文を判読することは難しい。

池宮正治は近世琉球の踊りの演目名が、採り物や被り物の別とその有無、若衆・二才・女・老人の類型で分けられており、『躍番組』にある節名から八重山芸能の受容と展開について指摘した。板谷徹は『躍番組』で演目名が同じ（例えば「若衆おとり 杖笠」）でも節や歌詞が異なるものが多くみられることから、「作り替え」の実態を指摘した。このように『躍番組』における演目名や節、歌詞に関する研究はみられるが、「立おとり笠舞手附」「立おとり無手之舞手附」については触れられてこなかった。

近世琉球舞踊の動線を図示記した資料は、管見の限り見あたらない。本稿では、この二つの「手附」が『躍番組』にある74番の演目のいずれかに該当すると仮定し、本文中の演目名より「立おとり笠舞手附」は笠を用いる演目（例えば「若衆おとり 笠杖」）、「立おとり無手之舞手附」は小道具を用いない演目（例えば「女躍 無手」）の節や歌詞をもとに、現代に伝わる琉球古典舞踊の演目と照合する。

この二つの「手附」がどの演目に該当するかを明らかにすることで、近世琉球舞踊の実態を知る手がかりとなるだろう。また、琉球舞踊譜の記譜法として活用できると考える。

【引用・参考文献】

池宮正治 2002 「『踊番組』に見る八重山芸能の受容と展開」『沖縄八重山の研究』法政大学沖縄文化研究所,237-243.

板谷徹 2019 「ある琉球士族の端踊り—『躍番組』にみる作り替えの趣向—」『ムーサ沖縄県立芸術大学音楽学研究誌』20,1-16.

本田安次 1999 「南島探訪記 「躍番組」」『本田安次著作集 日本の伝統芸能』第18巻,325-348.

与論十五夜踊「二十四孝」の一考察

源 園生（國學院大學大学院特別研究生）

与論十五夜踊の「二十四孝」のあらすじは、つぎのとおりである。

長者の大翁が三人の息子のうち最も親孝行の者に財宝を継がせようと考え、孝行心を試す。「知っての通り年も八十余になり固い物が噛めない。お前の子を殺し、その子が飲んで乳を飲んで一月でも二月でも長生きしたいと思う」。長男と次男は、わが子は取り替えられないと突き放す。三男は妻と相談するという。妻は、「私たちはまた子を産むこともできるが、大翁は二度と拝めない」と承諾する。大翁に三本小松の下に子を埋めるように言われ、泣く泣く穴を掘っていると、金銀の財宝が現れる。古歌「ウシクガジュマル」を歌い踊りながら退場する。

物語は、中国後漢代の孝行説話「二十四孝」の中の「郭巨」を源話としている。日本では御伽草子や寺小屋の教材、また、京都祇園祭の山鉾や浮世絵などに採取され、広く知られていた。これに関して、江戸初期の林羅山をはじめ批判が多く、中でも福沢諭吉は『学問のすすめ』の中で、「父母を養うべき働きもなく、途方に暮れて罪もなき子を生きながら穴に埋めんとするその心は、鬼とも云うべし、蛇とも云うべし」と厳しく批判している。それはこの説話が物語にとどまらず、教導として流布し、実生活に影響を与えていたことを示すものであろう。

沖縄では、北中城村の仲順大主の伝承に起源するとしてエイサー「仲順流り」が歌われている。また、宮良當壮によりチョンダラーから採取された記録がある。なぜ、老親の長寿のために幼児を生き埋めにする内容が、飽食のこの時代に取り上げ続けられているのであろうか。中国における「郭巨」および日本の「御伽草子」では、「貧しさゆえ赤子がいては老親が養えない」というものである。対して沖縄および与論では、「長者の大翁が年老いて固いものが噛めないから孫の飲んで乳で長生きするため」である。それは老人が、時代を超え国を越えて、常に疎外されかねない危うさにあることへのメッセージではなかろうか。さらに、与論・沖縄においては、「子は特定の祖先の徳を引き継いで生まれてくる」という「蘇り・命の連続」の観念が、民俗の底流にあることから許容されているのではないかと考察される。

つぎの課題として、与論十五夜踊の「二十四孝」の名乗りは、「出よふちやるむんや 吾んと長者の大衆やしが」で、一曲目の「三者早（サンバスウ）」の「罷り出たるハ 此あたりにおひてかくれもなき 大明て御座る」に準じた方言である。その成立過程を能狂言および組踊をふまえつつ研究していく。

【引用・参考文献】

福沢諭吉『学問のすすめ』岩波文庫 1987

宮良當壮『沖縄の人形芝居』郷土研究社 1925

宇野瑞木『考の風景—説話表象文化論序説』勉誠出版 2016

陳正宏『琉球本と福建本—「二十四孝」「童子撫談」を例として』九州大学学術情報リポジトリ 2009

折口信夫にみる沖縄の残像

—— 民族史観における他界観念」を読む ——

藤原美樹（國學院大學文学研究科博士後期課程）

折口信夫は亡くなる前年である昭和27年（1952）に発表した「民族史観における他界観念」において、自らの靈魂論・他界論を再構築しようとした。ここではタイトルにある通り、日本人の持つ他界観念が様々な角度から検討され、他界の在り方、靈魂との関係、来訪者の問題、靈魂の成長、他界の生物とトーテミズム等様々な課題が論ぜられる。折口は、日本人の信仰は祖霊信仰論だけでは説明できず、本源的にはさらに多様な靈魂信仰があったのではないかと問う。この中でとりわけ重要な論点の一つが「未完成霊」論である。「未完成霊」とは、一義的にはおとなになれずに死んだ者、横死や戦死などの不完全な死を迎えたものの靈魂をさすが、その位相は複雑である。折口のこれまでの靈魂観、他界観は沖縄訪問による影響が大きいことは指摘されていることであるが、「未完成霊」論に含まれる他界の在り方や、成年式の問題など、ここでも沖縄を契機としたテーマを明らかに読み取ることができる。沖縄探訪のもつ意義の大きさは、最晩年にまで及んだと考えられる。

折口は、大正10年（1921）、大正12年（1923）、最後の昭和10年（1935）と生涯三回にわたり沖縄を訪問している。大正12年の第二回目探訪では、沖縄から八重山にも足をのびた。主著『古代研究』は、昭和4年（1929）から翌年にかけて刊行されたが、沖縄探訪旅行がマレビト論をはじめとする折口の学問に大きな影響を及ぼしたことは、既に十分論じられてきた。一方、最晩年の他界論・靈魂論—とりわけその集大成である「民族史観における他界観念」への影響については、これまであまり触れられてこなかった。折口は八重山でみた「あながまあ」で祖霊に眷属が従ってやってくる姿を見たが、それが未完成霊とどのようにつながるのか、あるいは靈魂の成長という観点と「赤また・黒また」における成年式の意義、さらに他界の生物とトーテミズムとの関係などが沖縄との接点となろう。本発表では、特に大正12年の八重山訪問を中心に、折口の論述と、実際の祭祀儀礼との比較も加えながら考察したい。

【引用・参考文献】

- 小川直之 「祖霊と未完成霊—折口信夫と柳田国男の祖霊信仰論—」 2018年
狩俣恵一 「沖縄の来訪神—折口信夫のマレビト論をめぐって—」 2014年
「八重山諸島のアンガマと他界観」 1993年
波照間永吉 「南島祭祀歌謡の研究」 1999年
小島瓊禮 「未完成霊」 1983年
皆川隆一 「異郷と他界—折口信夫の方法—」 1983年
喜舎場永珣 「八重山民俗誌」 1977年

『久米仲里旧記』の地名と『おもろさうし』

前里貴史(名桜大学大学院修士課程)

沖縄には『おもろさうし』をはじめとした祭祀で謡われる神歌が文献資料として残されている。その神歌の歌詞には御嶽やグスクなど各地の地名も登場し、謡われる地名は当時の人々の思想が反映される。本研究では『久米仲里旧記』と『おもろさうし』で謡われる久米島の地名を比較し、『久米仲里旧記』の地名からみる当時の人々の宇宙観についての知見を得ることが目的である。『おもろさうし』の編纂された時期は1531年～1623年、『久米仲里旧記』は1703年とされている。編纂時期は約80～170年も離れているが、ともに久米島で謡われた神歌を収録している。両文献所収の神歌に出てくる久米島の地名を挙げ、その異同、また同様の地名の場合はどのような場所として登場するかを比較する。

琉球・沖縄の文献資料に出る地名を比較した研究に福寛美の『海東諸国紀』の『琉球国之図』の地名と『おもろさうし』がある。これは『海東諸国紀』の『琉球国之図』にでる地名が『おもろさうし』においてどのように謡われているかを論じている。また、久米島の地名を扱った先行研究には、仲村昌尚『久米島の地名と民俗』がある。仲村は『おもろさうし』や『久米仲里旧記』等に記載のある地名が出てきた場合は、その用例を挙げ詳細に記録しているが、文献間での比較検討はなされていない。

『久米仲里旧記』と『おもろさうし』に出る地名を比較すると、『おもろさうし』では、王府に征討される以前に久米島を治めていた按司を賛美するオモロや君南風をはじめとする神女に関する地名が謡われるオモロがあり、出てくる地名もその按司や神女と関わりが深い地名（グスクなど）が見られる。一方、『久米仲里旧記』では『おもろさうし』から80～170年ほど後に編纂されたこともあり、これらの按司は歴史上の人物となって、グスクや拝所の由来譚として出てくる。これらのグスクや拝所も『久米仲里旧記』所収の神歌には出てくるが、やはり特徴的なのは仲里間切内の人々が実際に雨乞いなどの祭祀を執り行っていた地名が『おもろさうし』と比較して多く謡われていることである。これらの相違からは両文献の資料的性格やある程度の編集方針などもうかがえる。

【引用・参考文献】

- ・仲原善忠 1978年 『仲原善忠全集 第三巻 民俗篇』 沖縄タイムス社
- ・仲村昌尚 1992年 『久米島の地名と民俗』 『久米島の地名と民俗』刊行委員会
- ・波照間永吉校注 2022・2023年 『琉球文学大系 1・2 おもろさうし 上・下』 ゆまに書房
- ・福寛美 2009年 『海東諸国紀』の『琉球国之図』の地名と『おもろさうし』 法政大学国際日本学研究所編 『研究成果報告集 国際日本学 第6号』 法政大学国際日本学研究センター

比嘉康雄・平良孝七・東松照明による「トライアングル」関係の多面的展開

—— 1972 年前後の沖縄写真界の展開を捉えるにあたって ——

大西達貴（東京外国語大学大学院・博士後期課程）

本発表は戦後沖縄を代表する写真家である比嘉康雄（1938-2000）と平良孝七（1939-94）、そして「本土」から沖縄に移住して活動した東松照明（1930-2012）の関係性について批評家の仲里効が名付けた「トライアングル」[仲里 2000、60] の概念を再考し、その多面的展開の可能性について検討することを目指すものである。

まずこの関係は平良と東松の邂逅に端を発していた。東松は 1969 年に初めて『アサヒカメラ』の特派員として訪沖し、身元引受人であり当時の沖縄写真界を牽引していた山田實との交流の中で写真教室の講師としての活動も行っていた。そして 70 年代初めには琉球政府広報課に勤めていた平良と出会い、東松が暗室を借りるなどして交流を深めていき、76 年には両者の働きかけにより県内初の自主ギャラリー集団「あーまん」が結成される。

一方で比嘉は 68 年に警察官の職を辞して上京し、東京写真専門学院で学ぶ中で東松の作品集『OKINAWA 沖縄 OKINAWA』（1969）を知る。そして比嘉は卒業論文のテーマとする程に東松に惹かれていき、72 年に沖縄に戻ってから平良を通じて東松と出会い、のちに比嘉にとってのライフワークとなる祭祀写真において共に写真記録・表現を模索する関係となる。また比嘉と平良の関係については、「あーまん」と並行して 81 年に沖縄県写真協会の結成への協働があった。

沖縄という場に引き合わされ、絶えず変容する「トライアングル」を構成した三者の間では、協働すると共に互いに分析、批評し合う中で「沖縄で写真を撮ることとは」という問いが循環し続けたが、それは同時代的な一つの図形にとどまるものではなく、戦後沖縄写真界の中心であり続けた沖縄写真部門の権威性への問い直しや、比嘉豊光や石川真生など後継世代の介入による展開も見られた。特に比嘉（豊）は「あーまん」への参加を契機に三者と出会い、石川は東松や森山大道など本土の写真家らによって運営された WORKSHOP 写真学校で東松から写真を学んだが、両者は「トライアングル」を構成する東松を写真家としては評価しつつもその「沖縄写真」に対しては批判的眼差しを投げかけ、沖縄から内発的に展開する写真の可能性を提起した。

本発表では、仲里が焦点を当てた「トライアングル」を踏まえた上で、東松を沖縄写真界に引き寄せた山田や、沖縄写真部門の権威性とそれに対する批判的超克の試み、そして東松の眼差しが持つマレビト性に鋭く切り込んだ比嘉（豊）や石川との連関などと合わせて検討することで、同時代的図形としての「トライアングル」が終戦から復帰、そして今日へと流れる時間軸の中で不定形の多面体として展開していた可能性について提起することを試みたい。

【引用・参考文献】

仲里効（2000）「比嘉豊光 ラディカルな〈風景〉の思想」『EDGE』（11） APO、58-71 頁。

冊封使と首里の四公子との交流について

—— 趙文楷と李鼎元の贈答詩文の分析を中心に ——

李舒陵（琉球大学・沖縄大学・県立芸術大学非常勤講師）

首里の四公子である向循師・向世徳・向善榮・毛長芳と冊封使たちとの交流は、李鼎元による琉球語の辞書『球雅』（『琉球訳』）の編纂事業がきっかけで始まった。『使琉球記』によれば、首里の四公子は皆漢文に通じた二十歳以上の若者であったが、『球雅』編纂の助手として李鼎元の下に遣わされ、李鼎元に「聰明善悟」との評価をされている。また、向循師・向世徳・向善榮は尚温王の一族であり、毛長芳は王妃の甥である。

首里の四公子の家系については、これまでに向循師のみ記録が確認されている。「向姓家譜 支流 伊集家」によれば、向循師（1773-1802 年）の本名は向尋思で、和名は伊集朝嶺である。向循師ら首里の四公子は首里出身の最初の官生及び「跟伴」である。向循師は李鼎元と親密な関係を築き、李鼎元から「循師」という名前を授かっている。向循師は、1802 年（嘉慶 7）10 月 5 日に、向世徳・向善榮・毛長芳とともに官生とその「跟伴」として進貢船に乗って那覇を出航したが、15 日に逆風に遭い船が行方不明になっている。10 月 17 日を向循師の忌日とし、享年三十歳である。

先行研究では、李鼎元の琉球語辞書編纂事業に首里の四公子が遣わされたことの背景について、前田舟子の『官生騒動』と副官生派遣問題がある。また、季龍飛は博士論文「清代福州柔遠駅における文人交流：康熙年間、陳元輔を起点として」で、趙文楷の「首里秀才向世徳等晉謁館中分韻賦詩題其後」に関する分析を行い、特に趙文楷に会う際に詩牌という文字遊びをしていたであろうことを示唆している。さらに、趙文楷が首里四公子の作詩の速さと内容の評価していたことを論じている。

本報告では、首里の四公子と冊封使正副使との交流に焦点を当て、冊封使が贈答した詩について分析を試みる。趙文楷の「使館即事適首里毛生長芳等投詩書此答之」と李鼎元の首里の四公子への贈答詩「雨中護國寺小飲」「首里向公子過訪」「雨中首里四公子過訪席上口占」「首里四公子招飲書齋、各以詩政、依韻贈答四首」（4 首）、計 8 首について、その詩作の内容等を明らかにしていく。

これらの詩の分析で、首里の四公子がまめに冊封使に詩を贈答していた姿勢が浮かびあがってくる。その贈答によって趙文楷の異郷での寂しさがやわらげられた。首里の四公子への感謝の気持ちもうかがうことができる。また、李鼎元の贈答詩では、李鼎元と首里の四公子がお互いの住处や書齋などを訪れ、和気藹々と酒を楽しむ情景が見られる。その交流を通して、李鼎元は首里の四公子に詩文の書き方の秘訣を伝授し、ともに『球雅』を校訂し、作詩を賭けに使って遊んだ。詩作から、『使琉球記』といった公的記録と琉球側の史料には見られない冊封使と首里の四公子とのやりとりの実態に迫ることができる。

【引用・参考文献】（五十音順）

- ・趙文楷撰『石柏山房詩存』清咸豐七年刻本、続修四庫全書編集委員会編『続修四庫全書 1485 集部・別集類』上海古籍出版社、2008 年
- ・李鼎元撰『詩竹齋集』清嘉慶七年刻本、続修四庫全書編集委員会編『続修四庫全書 1475 集部・別集類』上海古籍出版社、2002 年
- ・『中国冊封使渡来の時の正・副使及従客と琉球詩人との唱和』阪巻・宝玲文庫（ハワイ大学所蔵）HW759, <https://shimuchi.lib.u-ryukyu.ac.jp/collection/sakamaki/hw759>（2024 年 5 月 3 日閲覧参照）

中近世琉球における語彙の横断的研究の視点

照屋 理 (名桜大学)

ある語彙における歴史的な文脈について、遡源し確認することは、文化研究分野にとって重要であり、特に文学研究にとっては研究対象とする詞章の分析を進めていく上で必須ともいえる。琉球語やその関連語彙に関する研究は、言語学をはじめ歴史学でも追究され、琉球文学分野でも、多くの先達により進められてきた。

言語分野においては、ある複数の語彙に着目し時系列に検討を加えた成果として、例えば中本正智の『琉球語彙史の研究』(中本 1983) や、高橋俊三による「おもろさうし以後の言語」(高橋 1991) 等がある。

歴史分野において言葉・語彙に注目した研究には、豊見山和行の「琉球言葉と大和言葉をめぐる外交と交流(覚書き)」(豊見山 2014a)、同「『けふり・くちや船・脱体・みけい』考」(豊見山 2014b) 等が見られる。

文学において、まず以て挙げなくてはならないのは、『おもろさうし』をはじめ呪詞・神歌、琉歌、組踊などの歌詞や詞章をまとめあげた大著『沖縄古語大辞典』(沖縄古語大辞典編集刊行委員会 1995。以下『沖古辞』) がある。

上記の研究成果は、それぞれの研究分野を越えて広く学問的恩恵をもたらしており、これらの研究成果を更に推し進めていくことは、後進の務めでもあろう。文学領域において言えば、『沖古辞』は沖縄諸島の文学・文芸詞章を軸にまとめられ、奄美、宮古、八重山諸島の詞章は、主な対象とはされていない。また、沖縄諸島においても、『沖古辞』に取り上げられなかった呪詞・神歌、琉歌、組踊等の歌詞、詞章が摘み残されてある。それは、『沖古辞』発刊以降、新しい作品が発掘され、さまざまな形で公にされていることでも知れる。

さらなる新しい作品の解釈の手がかりに繋げるためにも、これまで解説・解説されてきた研究成果について、あらゆる視点から分野横断的に集約していく作業が、今後必要となることが想定されよう。

発表者は琉球文学を専門研究領域としている。本発表ではまず琉球文学の研究対象である『おもろさうし』および『混効験集』を中心にして、文学研究ではほとんど取り上げられて来られなかった『御膳本草』、『楊氏医方類聚』等といった文献を参照しつつ、その中のいくつかの語彙について、文学研究の視点から歴史的な背景や文脈の中に位置づけ、分析・解釈等を試みてみたい。

【参考文献】(五十音順)

- ・ 沖縄古語大辞典編集刊行委員会 1995 『沖縄古語大辞典』 角川書店
- ・ 高橋俊三 1991 「おもろさうし以後の言語」『おもろさうしの国語学的研究』 武蔵野書院
- ・ 豊見山和行 2014a 「琉球言葉と大和言葉をめぐる外交と交流(覚書き)」『近世琉球社会における言語運用の諸相に関する総合的研究』 琉球大学
- ・ 豊見山和行 2014b 「『けふり・くちや船・脱体・みけい』考」『沖縄文化』(第48巻2号 通巻116号) 沖縄文化協会
- ・ 中本正智 1983 『琉球語彙史の研究』 三一書房

戦後初期の児童文化活動の萌芽に見る戦前との連続性

—— 金城順亮を手がかりに ——

齋木喜美子（関西学院大学・教授）

約3カ月にも及ぶ地上戦によって学校や教育組織が崩壊し、米軍占領下で新たに出発しなければならなかった沖縄の戦後教育は、「ゼロからの出発」という言葉が象徴するように戦前との断絶の側面が強調されがちであった。しかし近年の先行研究によると、人的には戦後教員の過半が戦前の教員で占められ、その割合は1950年代の後半にかけて緩やかに低下しながらも連続していることが明らかとなっている¹。

では、戦前の人的教育資本は具体的にはどのように戦後の教育・文化復興に活かされていたのだろうか。本発表では戦後那覇市でいち早く学校教育を再開した壺屋小学校教員、金城順亮の事例からその一端を明らかにする。なお順亮は湾生（日本統治下の台湾生まれで戦後引揚者）で、戦後の小中学校で多数を占めていた沖縄師範学校および教員養成機関卒業者ではなく、沖縄戦の体験もない。しかし発表者は、教員構成員の絶対的規模としては少数ながら、引揚者が教育・文化復興に果たした役割は看過できないものがあると考えている。

周知の通り戦後初期の教育・文化に関する実践記録は史料的に乏しく、研究の隘路となっている。したがって発表者が用いたのも、順亮の著書『黒板日記』（むぎ社、1987年）とその原本、壺屋小時代の同僚でもあった奥様の美恵氏への聞き取り、履歴書、書簡と学校日誌、順亮が寄稿していた雑誌記事や当時の新聞記事等である。

それによると順亮は1945年10月に台北師範学校本科を卒業。翌年沖縄に引き揚げ、47年1月に壺屋初等学校教員になっている。そこで順亮が熱心に取り組んだのは、生産活動教育と童話の語り聞かせによる情操教育であった。校内で教員たちが始めた長編童話の語り聞かせは、2年後には幻灯機でスライド童話を語る島内行脚になり、やがて人形劇団「ゆうな」の結成、劇団「たんぼぼ」から「かじまやあ」へと引き継がれていく戦後沖縄児童文化活動の嚆矢であった²。順亮が文化活動を通じて情操教育に取り組んだのは、実は彼自身が1930年代に児童文化が盛んだった台湾で、川平朝申と弟の朝甫が始めた「銀の光子供楽園」の団員として活躍した経験によるところが大きい。当時の沖縄人に対する差別感も、台北放送局で流れる放送劇のおかげで誇り高い日々に変わったという³。順亮にとって子どもに美しく楽しい夢を与えることができるのは、「子どもの文化」だった。戦争による断絶ではなく、台湾時代に得た教育資本と精神が荒廃した戦後初期の沖縄教育・文化実践に引き継がれ、さらに後人の人材育成に繋がっていたのである。

【引用・参考文献】

1. 藤澤健一編『移行する沖縄の教員世界—戦時体制から米軍占領下へ』不二出版、2016年。
2. 津野創一編集『青い海』第8巻第6号、青い海出版社、1978年6月、108～117頁。
3. 金城順亮「沖縄人ここに在り—差別感御中で—」『新沖縄文学』第60号、沖縄タイムス社、1984年6月、22～23頁。

沖縄文化協会 2024 年度東京公開研究発表会のお知らせ

沖縄文化協会会長 仲原 穰

2024 年度東京公開研究発表会実行委員長 波照間永子

謹啓

時下、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、沖縄文化協会では、2024 年度の東京公開研究発表会を開催いたします。つきましては研究発表者を募りたいと存じます。会員の皆様で研究発表をご希望の方は、下記の要領でご応募くださいますようお願いさせていただきます。公開研究発表会の詳細については本会ホームページに掲載いたします。

謹白

2024 年度東京公開研究発表会

日時：2024 年 10 月 5 日(土) 9:00~17:00 (予定)

場所：明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント 3F 4031 教室

研究発表：1 人 30 分 (発表 20 分・質疑応答 10 分)

内容：沖縄の社会・文化に関する研究

申込要領：下記 HP 掲載の申込要領を必ず参照のうえ、下記 Google Form (URL もしくは QR コード) より、①氏名②所属③メールアドレス④報告タイトル⑤報告要旨 (1000~1200 字) を提出してください。発表者は査読の上、決定いたします。

申込先：<https://forms.gle/Gtg75r6SFgeKgsN69>

申込締切：2024 年 7 月 31 日 (水) 17:00



※申込にあたっては以下の要領をご確認ください。

- ・内容は**未発表**のものに限ります。
- ・要旨には基本的に、**先行研究、研究の背景、方法、結論**を含めてください。
- ・ひとつの発表を複数名で行う「共同発表」は 1 グループ 3 名までとし、全員が会員とします。また、代表者を明示してください。
- ・複数の報告を共通テーマの下、連続して発表したい場合は、報告要旨に「報告 A と報告 B はテーマが共通しているため、同じセッションでの発表を希望します」などと付記してください。なお、希望のあった報告が全て採用されるとは限りません。

【沖縄文化協会 2024 年度東京公開研究発表会実行委員会事務局】

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1 明治大学研究棟 307 波照間永子研究室

E-mail: jsos.tokyo@gmail.com

※発表者は決定後 (8 月上旬)、本会 HP 上に掲載いたします。

本会ホームページ <http://okinawabunka.c.ooco.jp>

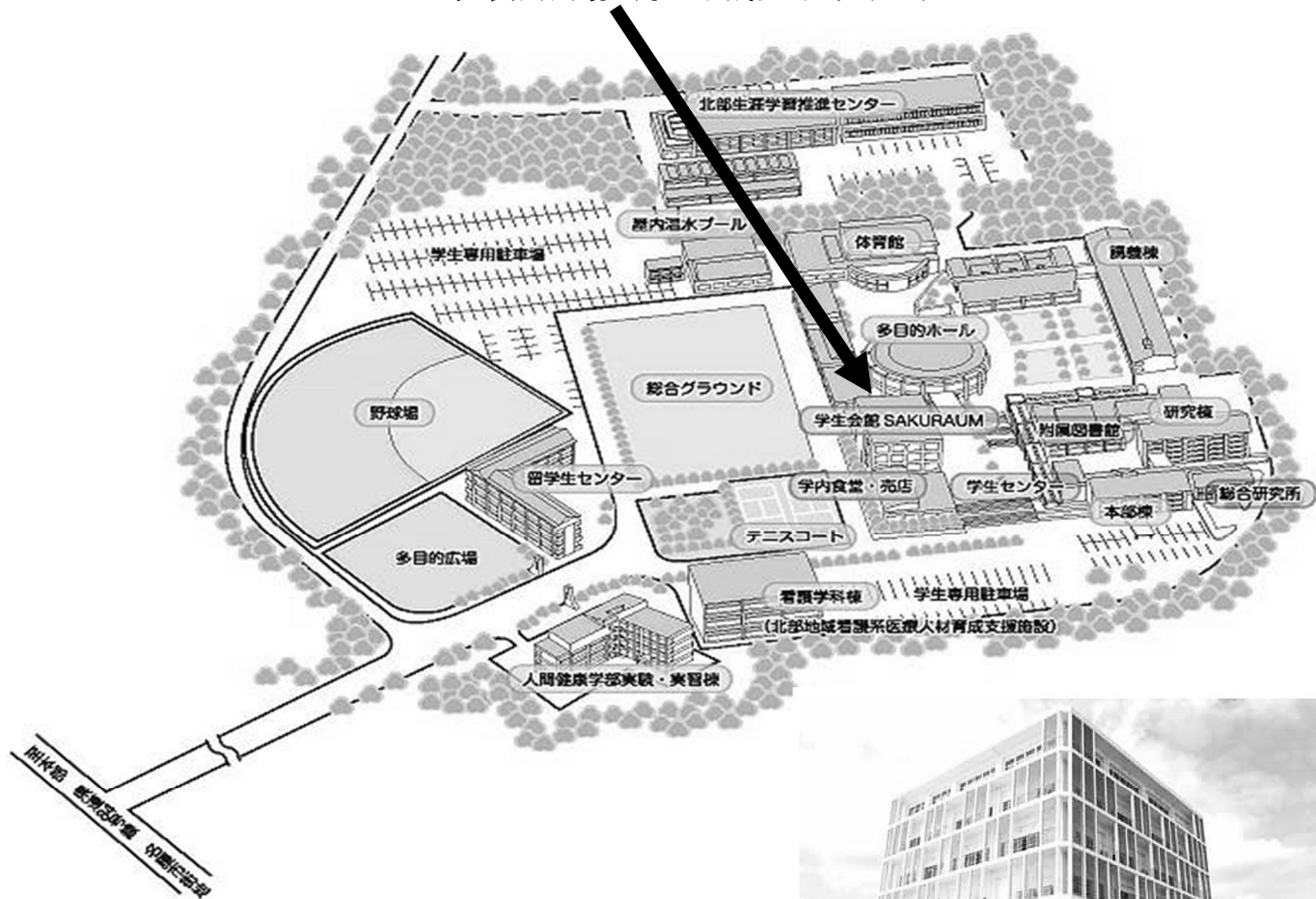
同日、下記の講演を開催いたします。ぜひご来聴ください。

特別講演「沖縄文化協会の歩みと展望」(仮)

波照間 永吉氏 (沖縄文化協会顧問／前会長・沖縄県立芸術大学名誉教授・名桜大学大学院特任教授)

◆会場案内

発表会会場（学生会館サクラウム）



発表会場はサクラウム 3F です。

一日目（6/29 土）は講義もありますのでお静かに願います。



名桜大学 学生会館サクラウム

◆沖縄文化協会会則

△ 沖縄文化協会は、沖縄の文化を研究紹介し、その進展に寄与することを目的とし、広く沖縄研究者および沖縄に関心を持つ人々を会員として運営されている会です。

△ 本会は、上の目的にそって、研究発表会、公開講演会、機関誌『沖縄文化』の刊行、沖縄文化資料の蒐集、複製、刊行などの事業を行っております。

△ 所定の会費を納めれば、どなたでも会員になれます。年間会費 5,000 円（誌代 2 冊分を含みます）。

△ 会費は振替もしくは現金為替で、下記の所へお送りください。

〒903-0815 沖縄県那覇市首里金城町 3-6

沖縄県立芸術大学附属研究所

鈴木耕太研究室気付

『沖縄文化』編集所

電話：098（882）5043

振替口座：02030-5-25170

URL：http://okinawabunka.c.ooco.jp/